「日々の理科」（第 898 号） 2016（H28）,12,21

「３年生にプラナリアを配る（３）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

金曜日の中休みに、３年生のワークスペースで、プラナリア大配布会が開催された。並んだ３年生はざっと 70 人！前評判がすごかったので、びっくりするほどの「飼育希望者」の列ができた。

今回は配るのが生き物で、３年生ということもあったので、プラナリアをもらうには、家の人の許可を前提とした。「引換券」は連絡帳の一行「プラナリアもらいます」と印鑑である。連絡帳（パスポート）を手にした長蛇の列、私は杉原千畝のように次から次へと仕事をした。途中からは領事館助手（２組の武蔵野夫人先生）も加わり、大幅にスピードアップ！

連絡帳に返事一文を書く余裕はないので、千畝の真似をして、こんなスタンプも用意しておいた。このスタンプも私の手作りである。「紫外線硬化樹脂」という特殊なフィルムと紫外線照射装置を使って作る。原稿作成→スタンプ完成まで、およそ 15 分でできる。今までに何百個も作ってきて、子どもたちのノートに押してきた。効果抜群だと思う。この「スタンプづくり」の技術についても、いずれ連載で紹介したいと思う。

さて、多くの子どもにプラナリアを配布するには、手際の良さが決め手となる。ピンセットや網ではまったく手に負えない。先を太めに切った、蛇腹型のプラスチックスポイトが一番適している。これしかない。

しかしプラナリアは、もともと流れのある川の底にある石などにくっついて生活している生き物だ。底着性で、「壁面にへばりつく力」は思いのほか強い。まず、スポイトに水だけを吸い取って、それを押し出して、プラナリアを浮遊させる。壁につかないうちに、２～３匹吸い取るのだ。吸い取ったあとも、モタモタしていると、今度はスポイトの内面にへばりついて、とれなくなってしまう。吸い取ったら素早く容器に入れてしまうことである。

ほとんどの子どもは「LG-21」や「R-1」の「飲むヨーグルト」の容器を持参していた。中にはあらかじめ、半分ぐらい水を入れさせておく。水道水で全く問題ない。かくして、子どもたちに「所有権」が移行した。音楽の時間に誰もいなくなった教室を見たら、ほぼ全員の机上にプラナリアの容器が置かれていた。